

毘羅三昧經と初期訳経

落合俊典

一 問題の所在

(一) 発端

平安時代の末期、安元元年（一一七五）から治承二年（一一七八）にかけて古本『貞元錄』に基く一千二百三十八部五千三百五十一巻の経巻を大半書写した尾州中嶋郡長福寺の住持栄芸、およびその弟子栄俊は、これら一切経書写の施主となつていた尾張権守大中臣安長が治承二年の十月に没した後もこの大事業を推進し、翌治承三年の八月、京都に藍本を求めて上洛した。

六勝寺の筆頭法勝寺は白河天皇が承暦元年（一〇七七）に創建した寺院であるが、院政時代の権威を象徴する「国王の氏寺」であった。この権威を如実に示したのが八角の大塔であったが、なかでも華麗な金字一切経は天皇家の権力と財力を関係者に知らしめたものである。この金字一切経は前後五回供養されたと言うが、この他にも数多の章疏、聖教類が経蔵

に収められていたことは想像に難くない。これらの經典、章疏、聖教類はどのような系統の書物を底本にして書写したのだろうか。あるいは何処か古刹の経蔵を開いて蒐集したのだろうか。聖教類は勿論のこと金字一切経の零簡すら失われた現在にあってこの方面の研究は全く進歩し得ないと思われていた。しかし、如上に述べたように尾州中嶋郡長福寺の住持栄芸、およびその弟子栄俊らがこの法勝寺の経巻を転写し、現在も名古屋の稻園山七寺に残っているのである。「法勝寺」もしくは「法勝寺本」と奥書にかかれているものは二十九点である。

本論に取り上げた『毘羅三昧經』の奥書には「清水寺に於て法勝寺本を以て書写し了わんぬ」と書かれ、さらに「一校を加え了わんぬ」と書写の誤りがないか点検したことが記されている。もつとも平安時代の末期ともなると此の校正の意味内容は、実際的行為を十分に伴わない装飾用語として使用された感がある。

このよくななか法勝寺に所蔵されていた稀観經典『毘羅三昧經』二巻を搬出し、清水寺で書写を始めた栄芸、栄俊らはかなり速いスピードで作業をすすめた。果たして誤写などはなかったのであろうか。七寺本には校正した明らかな形跡は数点を除いて殆ど見られないが、筆師達はどれくらいの正確度で筆写したのであろうか。

(二) 原初的形態の保存度

『毘羅三昧經』上下二巻は中国仏教の基盤を築いた道安(312～385)の『綜理衆經目録』(364)に載る書物である。七寺本は道安から八百年を経た上に、中国本土以外の日本の、しかも奈良京都から離れた尾張(名古屋)の地に於て書写された平安写経である。一般的に言えば平安写経は奈良写経と比較して写譲が多くその信用性が疑われ、校訂本に用いられることは殆ど見られない。誤写が多い場合は他の良質のテキストを求めるなり、対校本を多数蒐集して繁瑣な校訂作業の中から原形態を復元するという方法を取る。だが、この七寺本『毘羅三昧經』には対校する写本も断簡も残っていない。諸書に引用された文章も同一箇所のそれも僅か数行である。極端に言えば『毘羅三昧經』は七寺本のみで復元しなければならないのである。

さて校訂作業の結論を先に述べるならば、おそらく本書は

一般的な平安写経の評価をはるかに凌駕していると言えよう。だが、このよくなことはどうして分かるのであろうか。

通常の漢訳仏典であればサンスクリット語文献やチベット大藏經に同類書を見いだし、その原語なり対応する概念を参照することが可能である。その過程で翻訳の正確度や或る種の意図を浮き彫りに出来、漢訳原典としての厳密性が認定されるわけである。翻訳文献でなく、中国人が中国人の為に編集撰述したと考えられる『毘羅三昧經』そのものが有していた原初的形態の確認は、つぎの二つの方法に拠ったものである。

(ア) 本書に多用されている口語的表現の在り方によつて
(イ) 初期訳経に用いられている語彙との比較によつて

此のうち(ア)に関しては姚長寿氏の論文に詳しい。本稿では主に(イ)について考察するものであるが、何分にも初期訳経の分量は厖大である。『大正藏』に収載された後漢訳経八十部一〇五巻、三国六十五部九七巻、西晋百四十二部二八四巻、合計二百八十七部四八六巻もある。その上失訳の經典も相当数に上る。これらのものとすべてにわたって比較することは遅れているこの分野の研究に大きな朗報をもたらすものである。しかし、現在の筆者にはその余裕がなく、序論として大まかなアウトラインを辿ることが精一杯である。にもかかわらず、いくつかの代表的な訳経を取り上げ比較するだけで本書の厳密性を証明するには十分であろう。

(三) その他の問題点

本書が何時何處で誰によって撰述されたのか、尽きることのない興味が存するが、しかしこれは解決しがたき問題である。

經録に翻訳者として名前の挙げられた訳經僧ですら後世の仮託とされることもある。まして純正の仏教經典などではなく、「人造」の疑經として位置付けられてきた『毘羅三昧經』の成立時代から撰述者、撰述目的などを探ることは笑止千万に違いない。にもかかわらず本書に注目するのは、本書が歴代の殆どの經録に真經として扱われてこなかつたが故に逆に原初性を保持していると推定するからである。十世紀前後から始まつた刊本一切經鏤刻の大事業にあっては用意周到な校訂が施された。中にはその為に本来の文言句句が改められてしまつたこともあつた。大正新脩大藏經の脚注に見られる多種多様な語句の異同はそれを如実に物語つているものである。

二 中国佛教初期訳經との比較

中国佛教初期訳經とは、換言すれば後漢から三国・西晋を経て東晋の初期に及ぶ期間に伝訳されたものということになるであろう。もう少し狭義に初期訳經を捉える場合もあるが、道安の『綜理衆經目録』が成立した時期（西暦364年、も

しくは374年）までの訳經となればこのような範囲で妥当であろう。つぎに訳經者を列挙してみよう。

〔後漢〕 ①安世高 ②支婁迦識 ③竺朔仏 ④支曜 ⑤安玄
⑥嚴仏調 ⑦康孟詳 ⑧曇果 ⑨竺大力 ⑩康巨

〔三国〕 ①支謙 ②康僧會 ③維祇難 ④竺律炎 ⑤白延
⑥曇柯迦羅 ⑦康僧鑑 ⑧曇諦 ⑨支彌梁接 ⑩安法賢
〔西晉〕 ①竺法護 ②聶承遠 ③聶道真 ④竺叔蘭 ⑤無叉羅
⑥法炬 ⑦法立 ⑧帛法祖 ⑨支法度 ⑩安法欽
⑪若羅嚴

〔東晉〕 ①帛尸梨密多羅

以上の訳經者が翻訳した訳經の真偽も当然出てくる問題である。ところがこれだけ多数の訳經者になるとすべての經典に十分な考察が行き届かなくなるのはやむを得ないことである。そこで一応『出三藏記集』の該等する伝訳欄に記載されたものを中心とする。と同時に『出三藏記集』以降の經録に挙げられたのも伝訳經として考察の対象とする。また紙数の関係上これら訳經者の中から（一）安世高と（二）支婁迦識の二人の訳經者を取り上げてみたい。

(一) 安世高訳との比較

安世高（～157）の訳業について本格的に調査研究されたのは宇井伯寿博士の『訳經史研究』であろう。緒言にも述べられているようにその訳の理解は困難で理解し得られなかつた

箇所も妙なくなかったという。つぎに『毘羅三昧經』の語彙のなかから比較していってみよう。前述したように本来ならば個々の經典を一つずつ比較しなければならないのであるが、今回はマクロ的に鳥瞰することに止める。

(ア) 安世高訳との類似

○四意正斷(『陰持入經』) ⇨ 『毘羅』上巻372行、四意断 ○四諦苦習尽道(『四諦經』『陰持入經』) ⇨ 『毘羅』上巻356行 ○迦羅越家(『棕女祇域因縁經』『七處三觀經』) ⇨ 『毘羅』上巻171、175、181、184、204、208行 ○六衰(『七處三觀經』) ⇨ 『毘羅』上巻359行 ○池中自然生青蓮華(『棕女祇域因縁經』) ⇨ 池水中生蓮華(『毘羅』下巻234行) などが見られる。

(イ) 安世高訳との非類似

『毘羅三昧經』は大乗經典の中に位置付けられると考えられる。一方安世高訳は小乘經典の翻訳が中心である。対応する概念や語彙が少なく、正確な比較が出来ないが、全体的にみると対応関係は希薄と見なししてよいだろう。現存する安世高訳からの影響はさほど大きくなかったのではないかうか。

(ウ) 伝安世高訳との類似ならびに非類似

○四等慈悲喜護(『自誓三昧經』) ⇨ 『毘羅』上巻285行、下巻319行 慈悲喜護の四等心は、後に慈悲喜捨の四無量心として定着するものであり、比較には適當な語彙である。だが、この四等

(二) 支那迦讃訳との比較

心にしても古訳時代は一般的に使用されているので古訳旧訳の区別には有効であってもその古訳時代の中の区別には意味をなさない。もっとも四等心が引用されている『自誓三昧經』は必ずしも安世高の訳とは言い切れない面を有しているので慎重な対処が要求される。○四恩(『自誓三昧經』) ⇨ 『毘羅』下巻319行 ○五戒(『長者子懊惱三處經』) ⇨ 『毘羅』上巻9、178、276、277、278行、下巻47、49、51、149行 ○那術(『自誓三昧經』) ⇨ 『毘羅』下巻381行 ○癡無上正真道意(『自誓三昧經』) ⇨ 『毘羅』上巻23、44行、下巻306、366行 ○叉手(『自誓三昧經』) ⇨ 『毘羅』上巻152、268行、下巻255行 ○金銀琉璃水精珊瑚車渠馬瑙(『毘羅』上巻3、4、5行)。七宝については伝安世高訳が金銀としているのに対して黄金白銀としている点異なっているが、順次などほぼ同類とみなしてよいだろう。

○人非人(『毘羅』上巻38行等多數)を人民畜生(『長者子制經』)と訳している。○蜎飛蠕動之類(『毘羅』下巻30、286行)を蠕動(『長者子制經』)と訳している。一方『舍利弗悔過經』などは人民蜎飛蠕動之類としており一定しない。あるいはどちらかが仮託したものか。ちなみに両者とも『出三藏記集』では伝世高の訳業に挙げられていない。

『毘羅三昧經』の解説作業を通じて最も密接な関係があると考えるに至ったのはこの支婁迦讃訳である。今回は詳細な検討を省略せざるを得ないが、類似する語彙の密度が急速に薄くなつていくのは西晋に入つてからである。当然東晋時代になると類似する語彙は安世高から羅什、玄奘と一貫して用いられてきた語彙に限られてくる。

支婁迦讃訳の特徴は大乗經典の翻訳にあるわけで、その意味からも『毘羅三昧經』の基本的性格もそこに収斂していくものと見なして相違ない。そのように見ると、さらにしげの段階に目が向くのであるが、これは經題と大きく関係することである。毘羅とは一体何か。この奇妙な言葉は支婁迦讃訳の『遺日摩尼宝經』に出てくる。

菩薩毘羅經菩薩有四事。求經道及有所求不中斷。何謂四事。但求索好經法。六波羅蜜。及菩薩毘羅經。及仏諸品。

(『大正藏』十二卷一八九頁下段)

勿論、毘羅なる言葉は金剛 (Skt. vajra) の意味に取る学者もいるし、またインドの樹木吉祥果 (Skt. bīva, vilva) に充てる見方も有力である。また鳩摩羅什訳の『坐禪三昧經』に

「如毘羅經中優填王阿婆陀那說。」(『大正藏』一五卷二八二頁中) と出る」とからシャーダカや譬喻經などに関連する經典

と見る研究者もいる。しかし、中国仏教に始めて現れた中国撰述經典にはそれなりの大きな時代的背景が有つて然るべき

であろう。毘羅三昧という言葉にこの經典の編纂者の意図が如実に反映していると見なくてはならない。だが、この問題はより大きな思想史的運動の中に位置付けられるべきものであると考える。今そこまで論述するには厖大な基礎的作業が終了していない。よつてこの問題はいずれ稿を改めて論ずる予定であるが、『遺日摩尼宝經』に述べられた「何を謂いて四事となすや。但だ好き經法と六波羅蜜と及び菩薩毘羅經、及び仏の諸品を求索するのみなり。」という文は重要である。

六波羅蜜は、時代的に大乗佛教興起の重要な基本的用語と見てよいだろう。その場合「菩薩毘羅經」なる言葉が注目されるであろう。菩薩と結び付いた毘羅經。インド西域に於ける大乘佛教運動に当時の中国佛教界がどれほど関心を抱いていたか明らかでないが、少なくとも支婁迦讃の訳に触れた人々は大いなる関心と疑問を抱いたに違いない。特に魏晉と時代が下がるにつれ、大乗經典の翻訳も増えるにつれその関心は強まつたに相違ない。そこに現れたのが『毘羅三昧經』ではなかつたろうか。

(ア) 支婁迦讃 (～184～) 訳との類似

○自貢高 (『遺日摩尼宝經』) ⇄ 『毘羅』下卷 46 行 ○卿曹 (同上) ⇄ 『毘羅』下卷 172、173、184、185、357 行 ○我曹 (同上) ⇄ 『毘羅』上卷 52、58、90、91、166 行、下卷 177、180、191、376 行

○四意斷（同上）⇨『毘羅』上卷372行 ○小道（同上）⇨『毘羅』下卷21行 ○大道（同上）⇨『毘羅』下卷24、347行
 これら類似する語彙の内、小道と大道は重要な用語である。『毘羅三昧經』の下巻の18行から31行まで引用してみよう。

居士言。須陀洹者有七死七生。斯陀含三死三生。阿那含一死一生。阿羅漢為弟子行。但度一身。不能度余人。緣一覺者辟支佛也。索空着空。索出為空所縛。故有限度為小道也。阿惟越致有六輩。一者內身。二者法身。三者經身。四者法輪身。五者無所罣身。六者智慧身。阿惟越致已發大道意為受持菩薩。阿惟願者為一生補處。當得作佛。菩薩者悉博衆經。大士者為摩訶薩。了知摩訶般若波羅蜜故。一切仏深經微妙之慧皆曉了。其法大其意廣。其心通。其趣無端底。無上無下。無邊無際。無量無限。大法蕩蕩。周通廣遠。為一切人非人作唱導本誓言。十方天下蜎飛蠕動之類。有一人不者。吾終不取道也。

『遺日摩尼宝經』には「不喜小道、心喜於大道」とある。周知の如く『遺日摩尼宝經』は幾つかの異訳とサンスクリット語写本、チベット訳を有する資料である。Staël-Holstein (鋼和泰) の The Kāśyapaparivarta (大宝積經迦葉品梵藏漢六種合刊)によれば、まず晋代失訳『摩訶衍寶嚴經』は「不染小乘、染大乘功德」とあり、『大宝積經』第四十三普明菩薩会は、「不貪小乘於大乘中常見大利」とあり、施護訳『大迦葉問大寶積正法經』は「遠離小乘正行大行」となっている。

Skt. च hīnayānasprhaṇātā, mahāyā ne cānuṣaṁsaṁsaṁda-

rṣitayā व्याप्तिः च व्याप्तिः Tibet. ། theg-pa-dman-pa-la-mi-hdod-cin/theg-pa-ch'en-po-la-plan-yon-du-lta-ba-dan हेवरि、 व्याप्तिर्थे द्वारा अनुवाद एवं बहुत संक्षिप्त व्याप्तिः च व्याप्तिः है। 『毘羅三昧經』が大乗經典のジャンルに入るゝとは、このことからも分明であろう。

ついでに『阿闍世王經』を取り上げてみたい。阿闍世王は仏教經典のなか、とりわけ浄土經典に關係が深い人物であるが、『毘羅三昧經』の中には太子阿闍世王の布施物語が續々説かれ、この經典の一大特徴となっている。その類似するストーリーで、阿闍世王と太子阿遮王との音が類似していることから、『毘羅三昧經』の編纂者がこの『阿闍世王經』からも強い影響をうけたものと推定する」とが出来るのである。

この他（イ）支婁迦讃訳との非類似、（ウ）伝支婁迦讃訳との類似ならびに非類似などについても考察しなければならないが省略する。また、訳経者支曜、康孟詳、支謙、康僧会、竺律炎などの訳経などとも語彙ならびに内容上密接な関係があつたものと推測するのであるが、これらの考察も今後の課題とした。

（注略）

〈キーワード〉 毘羅三昧經、支婁迦讃、疑經、七寺一切經

（華頂短期大学教授）